

武蔵野日曜聖書講筈

自由の霊

――コリント後書第3章17～18節――

1989年12月3日

小池辰雄

奴隷状態からの解放 本当の自由 絶対者へ帰って行く 天然自然・霊然・神然 アナンケー（やむにやまれざるもの） 神然・人然 愛の極致の十字架 神からの道・神への道 自由の霊 自由は愛の霊（参考）矛盾に於ける魂の為樂（『エン・クリスト』40号）

【コリント後3】（私訳）

……¹⁷主は即ち御霊^{みたま}なり、主のみ霊のある所には自由あり。¹⁸我らは皆面^{かお}覆^{おおい}を除かれて鏡に映る如く主の栄光を見、主のみ霊によって、栄光より栄光へと進み、主と同じ相^{すがた}に化するなり。……

●奴隷状態からの解放

「キリスト者はあらゆる事に対して自主なるものであつて、何ものにも従属しない。また、キリスト者はあらゆるものに仕える者であつて、あらゆる人に奉仕する（仕える、従属する）」

と。ルターは、そういうまるで反対のような二つの命題をパウロのコリント前書9章19節から編みだしたんです。

「¹⁹われ凡ての人に対して自主の者なれど、更に多くの人を得んために、自ら凡ての人の奴隷となれり。」（コリント前9・19）

この言葉です。「自由」という言葉はギリシヤ語では「エリユーセリア」という言葉ですが、けれども、もともとの意味は、奴隷状態から解放されることなんです。昔は、奴隷というのはイエス・キリストの時代には大いにあつたからね、ローマでもギリシヤでも。主人の言いなりに全部従つて、そうでなければ殺される。日本でも、封建時代には相当そういうことがあつた。それは「奴隷」という言葉よりもいい言葉では、「僕^{しもべ}」なんです。ご承知のとおり、イザヤ書53章を中心とした「主の僕の歌」というのがある。

「エベッド・ヤーヴェー」「エホバの神の僕」

という。預言者は僕である。神の意志を受けとつて、それを行じていく。だから、キリスト自身が「神の僕」です。キリスト自身が一番立派な僕なんです。「聖意体现」という。自分の意志を棄てているわけです。自分の考えをすてて、



「神さま、あなたの言いなりになります」

「御意をなさせたまえ」

という言葉がありますね、

「どうぞ、私をお使いください」

と。自分をゼロにしていると、無限大になる。エラスムスは、道徳哲学の方の角度から、

「人間は自由意志がある。これは非常に大事だ」

といって、「自由意志論」を書いた。哲学の世界ではこれはいい。カントは自由意志を言っ

「汝は為すべきが故に為し能う^{あた}」

とまで言ってしまった。「為すべきが故に為し能う」ということを本当にできるひとは、キリストの他にいないんだ。けれども、

「本来、人間はそういうはずの者である」

ということは、道徳哲学の原理としては真理なんです。でなければ、道徳は成り立たない。「為すべきが故に為し能う」というところが、なかなか「為し能わない」。「為すべき事を為し能う」ような魂は、本当の自由を持った魂でなければできない。

「キリスト者は何びとにも依存しない」

ということは、神さまにだけ従っているということ。神・キリストには100%に従っている。そうしたら、我々は本当は自由なんです。

即ち、キリストは神に奴隷であって不自由であった。自由を棄てた。そうしたら、神は絶対者だから、キリストは素晴らしい自由なんです。本当の僕が本当の自由を持っている。本当の僕は――相手は、神さまは絶対者だからね――絶対者に、天的な天意に従うことは、天意が行ぜられることは最大の自由なんです。そんな自由は、普通の人は知らないですよ。今、普通に言っている「自由」だの、「自主」なんてのはみんな自分の意志で動いている。ところが、自分の意志は欲とからまって、これが人間の関係でいつも問題を起す。それでゴタゴタゴタゴタやっているのが、個人でも、社会でも、国際関係でも、みんなそうだ。

● 本当の自由

この頃、ロシアのゴルバチョフが統制を相当ゆるめてきて、本来人間はやっぱり自由の面がないとだめだということが分かってきたから、「ペレストロイカ」といって改革を始めた。東の国々が、民族や地方が自由を主張し始めて、運動が起きているでしょ。昨日の晩ゴルバチョフとアメリカのブッシュ大統領とが対談した。これはお互いに胸を開いた対談になりそうですね。大変、結構なことですよ。本当の政治というものはやはり誠心誠意を持っていなければだめなんだよな。策略を持っているものはだめなんです、結局は。開けっ放しの誠心誠意が本当は一番力がある。それは自己にとらわれない、その自由の魂です。



日本人は自由の再認識を――再認識というよりか――新しい認識をしなければならない。そのためには、

「ルターを本当に学べ。経済大国から宗教大国になれ」

ということです。宗教大国は、日本人にはとても不可能だけれども、そういう人が現れてこなければだめなんだ。政治家でも、本当の宗教心を持った政治家が出なくてはだめです。もう、私は遠慮なくものを言いますから、日本に向かつて世界に向かつて。まあ、ありがたいよ、預言者的な使徒的な霊が入ってきたからね、恐いものがなくなっちゃった。

「本当の自由とは何だ」

ということです。ルターの大事なものは、ローマ法王レオ十世の免罪符に対して、とんでもないと言って反対したことです。特にドイツはまだ国が独立してないものだから免罪符を売るのに非常に楽なんだ。それで、ローマから僧テツツェルというとてもないやつがヴィッテンベルクにやって来たんだ、赤い旗をかかげながら。

「免罪符を買えば、お前の地獄へ行っている親しい人の魂が、その金が箱の中でチ

リンと鳴や否や、天国へ飛んでいく」

なんて、そんなバカなことを言って売り歩いた。冗談じゃないよ。そんなことをして愚民をだまかしている。何をぬかすかというわけで、ルターは――しかし、それでも喧嘩ではなくて――免罪符に対するところの公開状を、九十五箇条を書いたわけだ、討論したいというわけで。これが宗教改革の口火になったわけでしょ。その時の、九十五箇条の第一条が非常に大事なわけです。著作集第七巻『聖書の人ルター』（1984年刊）に書いてあります（53頁）。

「我らの主にして師なるイエス・キリストが『汝ら悔改めをなせ…』と言い給うとき、

彼は信徒の全生涯が悔改めであるべきことを欲したもつた。」（マタイ4・17参照）

「悔改めをなせ」と言ったときに、クリスチャンの全生涯が悔改めである。「悔改め」という言葉が、まちがってはいないけれども、これは困る。ヘブライ語では、

「帰る、回帰する、めぐり帰る」

という字です。ギリシヤ語では「メタノイア」という。これは

「回心」

の方です、心の方向転換です。普通は「改心」という言葉を使うが、私は「回心」と書く。預言者の方は凄い。

「心を変えるばかりではない、身心を神に向かつて帰れ、向き直れ。自分を見ているのでも、横を見ているのでもない。神さまを見る」

ということ。私たちは、神さまは見えない。見えざる神です。その神を現象しているキリストを見たらいい。キリストに帰って行ったらいい。我々はキリストに帰る。福音書に出ているとおりです。全存在でかえっていく。それはどうしたらいいか。これは神秘的



に帰るわけにいかない。これは祈り入る、祈入。また、帰入することです。帰り入ること、祈り入ること。祈りながら、自分をキリストの中に投げ入れることです。冥想して、

「主さまー」

と。私はもう簡単だからね、バカだから。みんな、利口すぎて困るな。幼児おきなごの如くなる。だから、私の本当の名前は「天童」かもしれない。天的なおきなごです。七面倒臭いことは嫌いなんだ。どうしてこう、七面倒臭いことが嫌いだからね。それで、簡単でいい。

●絶対者へ帰って行く

帰ること。クリスチャンの生涯は――いや、クリスチャンに限らない。人間の生涯は――如来でもいいよ、お釈迦さんでも何でも――そこに帰って行けと。

「絶対者のところへ帰って行け。帰ることが本当の前進だぞ」

ということですよ。今の読書界も古典に帰らなければだめなんだ、古典をいいかげんにしていたらだめだ。精神的に偉大なものはみな今までに出尽くしている。そこに帰る。けれども、帰ることは、帰りながらいいよそれをまた新たにしていく。その人を通して展開していく。だから、

「栄光より栄光へと、ついにキリストの相すがたに化するなり」

という。けれども、あなた方一人一人、A君はA君らしく、B君はB君らしくて、キリストの姿になっていくんだ、全体主義ではないから。神さまは一人一人を天下一品にお造りになっているんだから、何も人をうらやむ必要はない。勉強ができなくなつて構わないよ。何か他にとりえがあるんだから。何でも大学へ入れではない。それぞれの特色を生かせばいい。

「自分には必ず何か神さまがくださっている特色があるんだ、とりえがあるんだ、才能があるんだ、技術があるんだ」

と。何でもいい。男でも女でも。そういう自信を絶対にもっていただきたい。学校の成績なんかどうでもいいんだよ、まあちよつと言い過ぎかもしれないけれども。今に見てると、人生は馬拉ソンだから。そんなことを言うと、うちの子供なんかみんな喜んじやうね、勉強しないのばかりだから（笑）。

「ただし、自分の使命を感じる」

というわけです。生きることは課題がある。神に尽くし、人に尽くす。人のためになり、神のためになる。本当の意味で、神のためになることは、キリストのためになることは全部、人のためになる。だから、

「神を愛することと隣人を愛することは一つだ」

とキリストも言われた。縦と横は一つなんです。

木喰上人のうたに、



「本来東西無し」

何処にか南北有らんや。

迷うが故に三界は城となり

悟るが故に十方空なり。」

とある。もう、西も東もない。それだけの政治家が出て来なければだめなんです、大政治家が。そのためには、大宗教を、本当の宗教心をもたなければだめです。「政教分離」なんて、何を言っているか。それは直接には分離でしょう。けれども、宗教が根底になくてはならない。グラッドストーン、リンカーン、ビスマルク、これはみんな非常に聖書を愛読した人たちです。それが大政治家なんです。だめだよ、まだ日本はその点で。聖書を棚の上にやってゴミだらけにしているようでは。大体、聖書を持っていないもの。大学の先生も聖書なんてあまり読んでない。どういう国かね、これ、マンガばかり。電車で見るといって、大体、開いているのはマンガの本ばかり。何をやっているかと言いたくなるんだね、私は。喧嘩することはないけれども。内村先生や藤井先生がいたら、もう、憤死しちゃうな。憤りで死んじゃうな、あれは。

生涯が回帰、帰入です。毎日帰入している。そして、

「エン・クリスト」

キリストの中に在って、一つとなっている。そういう一如の世界です。それが本当の自由の世界だというわけです。しかも、それは人間性を何か没却するものではないですよ。キリストは本当に神さまと一つになったが、いかにもキリストは情の深い人だし、意志の強い人だし、ちゃんと、イエス・キリストというひとは知情意のバランスがとれている。神人一如の境地がイエスというひとだ。笑いもすれば、泣きもするし、お酒も飲むし、御飯も食べるし。

「食をむさぼる者だ」

なんて言われた。私もだいたい食べる方だ、何でも食べるから。嫌いなものはないもの。何も健康法なんてやっていない。

●天然自然・靈然・神然

キリストは「神然」です。私たちはこの神然にはなれない。我々は、十字架を本当に受けとつて、もう過去・現在・未来の私は、あなた方一人一人は、

「どうだった、こうだった、これからどうなりそうだ」

なんて、そんなことは何も心配はいらん。人にどう思われようが、どう扱われようが、一向差し支えない。

「それを全部引き受けた」

というのが、このキリストの十字架なんです。



「私はお前の全部を引き受けたよ、心配するな」

と。そうすると、からっぽになつてしまふんだ。何もなくなつてしまつてゐる。そうすると、そこには聖霊が入ってくる。だから、私たちは十字架を本当に受けとると、「靈然」たる人になる。この「然」という字は、下の四つの点は火です。それから、上の部分も火のことです。だから、火が三つある。火が燃えているという字です。面白ね、漢字というのは。炎々と火が燃えている。靈的な御霊が炎々と燃えている。

「火と霊によつてバプテスマする」

というのは要するに、

「炎々たる霊をもつてバプテスマする」

ということなんだ、キリストの聖霊のバプテスマは。だから、御霊に化せられて全身が熱くなる。あなた方は深く祈つてゐると、何となく全体が熱くなるでしょ。風邪なんかすつ飛んでいつてしまふ。

「どうも、今日は風邪にかかりそうだ」

なんて思えば、かかるよ。

「かかるものか!」

なんて言つていれば、寒い風もああ涼しいなあと。私は正直、1950年以来、御霊を受けてから風邪を引いたことがない。

天然自然という。この天然自然の美しい地球をそこねたら、もう自滅する。全く人間は救いたいよな。お釈迦さんやキリストが出てきたわけだ。そのかわり、そこに入つたら楽しくてしょうがない。楽しくてしょうがなくて、地上で私はもう樂園みたいなんだ、どんなことがありまして。

いろいろなことにでつくわせば、逆に聖霊は力強くはたらきたもうから、光が強くなるから、ありがたくてしょうがない。絶対に行き詰まらない。はつきり言います。あなた方、せっかくこれだけの福音を受けたら、本当にそうなつてくださいよね。あなた方がそうならなければ、私は天界に往くわけにいかない。もう、人ごとではないんだ。一人一人がそうなれば、これが「遺れる者」なんだ。

私の所から出ていった者がたくさんいる。けれども、

「やつぱり小池先生は本ものだった」

と言つて――歸つてこなくなつていいよ――そこで本当のところをつかめば、それが遺れる者になるから。私は破れ器ですよ。破れ器の中に「本もの」があるんだから仕方がない。

●アナンケー（やむにやまれざるもの）

この「仕方がない」ということを、著作集第十巻『聖書は大ドラマである』（1988年刊）の「11月28日 アナンケー」の所に書いてある。



「11月28日 アナンケー（やむにやまれざるもの）」

「¹⁶我れ福音するとも、我れに誇るところ（カウケーマ）無し。やむにやまれざるもの（アナンケー）我を庄倒し居るなり。我れもし福音せざれば、我れは実に禍^{わざわい}なるかな！」（コリント前書9・16）

こんな訳は他にないですよ。あなた方一人一人は誰でも、

「やあ、この人には伝えてやろう」

と思つたら、遠慮なく語つたらいいです。一対一の伝道をして、

「こういう世界があるから、来たりて見よ」

と、集会に連れてきなさい。集会にさっぱり見えない人があるよ、結局、ご自分がダメになるだけのなしです。

「キリスト・イエスという恵みそのものが、義の実力者が、愛の実体が、そしてキリストの霊と一如なる聖霊の力がパウロの上にのしかかっている。パウロはキリストに全く庄倒されて生きている。「われ生くるに非ず、キリストわが衷^{うち}に生き給うなり」（ガラテヤ2・20）の現実である。だから福音伝道（福音）せざんとするも能はずなのである。これを「やむにやまれざるもの」（原語アナンケー）、天的必然、靈然、まことの自由を以て福音しないではいられないと叫んでいるのである。必然と自由は一つなのである。生ける靈法である。

佐藤一齋がその「言志録」の中で、

「雲煙集於不得已。

風雨漏於不得已。

雷霆震於不得已。」

と詠じているように、雲も霧もやむを得ずして集まる……そういう自然界の必然法則のように道德界もそうであるなら、それを「至誠」という。宗教界では、パウロが此処で言っている「やむにやまれぬ」言動は聖霊の力であり、生ける靈法であつて本当の自由即ち靈然で、原語のアナンケーである。西郷南州は、一齋のこの言が好きで、天を相手として生きたら、そういう在り方となった。ヒルティも『眠られぬ夜のために』第一巻四月十四日の箇所で、「せざるを得ずして為す人のみが偉大なことを為す」と言っている。ルターはウォルムスで「我かくせざるを得ず、我此処に在り、神よ助け給へ！」と叫んだ。」

自分で言つてはおかしいけれども、この一頁一頁は本当に厚みがあるんですから、身体で読んでくださいよ。

「そっくだー！」

というわけだね。電車の中で読んでいたって楽しくてしょうがない。だから、私はこの本を一冊書いたら、もういつ死んでもいいと思つたんだよ。一切がここに書いてあるから。



こないだの『エン・クリスト』40号（1989年10月季月号）に書いた「矛盾に於ける魂の為楽^{いらく}」というやつです。この全十巻は一つも無駄な巻はないです。

●神然・人然

この十巻を読めば、みんな驚くんです。これは御霊の力で書いているんだから仕方がない。頭で書いてないから。

「わが言は^{ことば}霊なり生命なり」

と。沉んや聖書に於ておや。聖書は本当に、

「これはどういう意味だ」

なんて言っているうちはダメだよ。聖書に圧倒されて、

「いやあたまらん。力が来てしょうがない、光が来てしょうがない」

と、そういう読み方をしなければ。あなた方、福音書を電車の中でも読んでみる、読んでみると叫びたくなる。

「あれは間違いではないか」

なんて。本当に文字どおり「わが言は霊なり生命なり」です。

「起きよ!」

たとえば、死人が起きてしまうんだから、大変なもんだ。しかも、本当の意味で人間性を生かしていくんですよ。だから、私はそれを

「人然」

といつてもいいと思う。こんな言葉は今日初めて言う。その世界に入ると、本当の人となる。神然^いに対して人然だ。我々は本当の人らしき人になる。泣きもすれば、笑いもするし、憤りもするし、冗談も言えるし。全部それは天の光によって動いている。これが本当の自由というんです。

それで、その自由はどういうのかというと、神・キリストの聖霊は愛の霊だから、この自由は愛にはたらくんです。自由と愛とが一つになる。自由が動き出すと、これは愛なんです。力を持っている。助ける力を持っている。人を本当に救う力を持っている。助け救うことが愛するということです。

●愛の極致の十字架

「爰^{こゝ}にイエス已^{ことば}を信じたるユダヤ人に言いたもう『汝等もし常に我が言に居らば、

これも大事だね、「我が言に居る」とは言という現実の中に居るということです。「言を守る」なんていう言い方よりも、「言に居る、言に在る」という言い方が大事です。その中に在れば、もう自然に守っているんだから。」



真^{まこと}にわが弟子なり。また真理を知らん、而して真理は汝らに自由を得さすべし」(ヨハネ8・31～32)

これと対照しているのが、同じ章の44節です。

「汝らは己が父、悪魔より出でて己が父の慾を行わんことを望む。彼は最初より人殺しなり、また真^{まこと}その中になき故に真に立たず、彼は虚偽^{いつわり}をかたる毎に己より語る、それは虚偽者にして虚偽の父なればなり。」(ヨハネ3・44)

欲だの偽りだのというのは、これはみなサタンだということ。サタンが持つている自由はとんでもない自由なんだ。ところが、こういう慾心の自我^{いつわり}というやつが要するに「罪」なんだから、そういう罪の奴隷になっている。これはパウロも言ってます。

十字架は即ち贖いだから、罪の奴隷から解放される。十字架で贖われたから。十字架は私たちのために己を棄てた愛の極致だからね。愛の極致の十字架でもって我々は自我を、欲の父のサタンの手下から解放されて、そして神・キリストの中に入れられた。そうしたら、本当の自由を得たということですからね。いわゆる自由で勝手なことをやっているのは決して自由ではない。それは自分の欲に、自我にからまれて、逆に自我の奴隷となっているところが、サタンの奴隷となるのと、神さまの奴隷となるのとは大違いなんだ。片一方は地獄に入る。もう一方は天国だ。自由は愛の力をもっている聖霊だからね。

17主は即ち御霊なり、主のみ霊のある所には自由ありという。

●神からの道・神への道

それで、キリストは

「我は真理である。我は道である。我は生命である」

と仰つたでしょ。あれはみな定冠詞が付いている。

「我こそは真理だ、道だ、生命だ、愛だ」

と。何だつていいよ、それはみんな一つなんだから。

「自分は神さまからの道、神への道だ」

と。キリストという道を通らないとだめです。いつも申し上げているとおり、日本人は道の民だから。茶道、弓道、剣道、柔道、書道、画道という。真理が身につくことを「道」という。

あの一休和尚がそうだ。それから、秀吉に殺された利休です。自殺した。秀吉というやつはとんでもないやつだ。私は嫌いだ。ことにキリスト教を迫害したから。家康がその後をまた輪をかけてやった。信長はよかつたんだけど。その少し前に、九州での殉教の場所を読むと……大変なことだった。カトリックのあの人たちは本当に素晴らしい。

そういう道の世界です。キリストという道に即すると、即道すると、そこが自由である。



自然界ではどうですか。鳥です。鳥には道がない。無道なんだ。鳥は正に無道の道を動いている。道無き道。これが本当の自由なんだ。無道の道です。キリストという道も、これが道でござるなんて、律法的にいう道ではない。毎日毎日、仰ることが無道の道――無言の言と言ってもいい――それが本当の自由です。

それは祈り心ですすぐそれが受けとれていくから。受けとるのはいつも自分が無くなってしまっているんです。無の世界です。私がこうやって皆さんとお話している時には、壇上に立つと私は無なんだから。これから何を話しかなんて考えてないんだ。そういう自由です。こないだも、クリスチャン・ペンクラブの人たちが、私がいわゆる論理的なものの言い方をしないものだから、聞きながら喜んでいるんだ。時々、本当の意味で笑っている。私はもう何ものにもこだわるものがなくなってしまったからね、人間の相対的判断はどうでもよくなってしまったから。ということとは、

「あの野郎はデタラメか」

なんて、そうじゃない。デタラメではない。私の話の気合、といいますか、気持はお分かりになりましたね。そういうわけです。

イザヤ書35章を、キリストがこれを現象なさった。

「⁹かしこに獅^{しし}おらず、あらし獣もその路にのぼることなし。然^{され}ばそこにて之

にあう事なかるべし。ただ贖^{あがな}われた者のみそこを歩まん。」(イザヤ35・9)

この「贖^{あがな}われた者」という言葉が「自由にされた者」と訳してもいい。自由なる者、解放された者。

「贖^{あがな}われる」

ということと

「自由になる」

ということとがそこでは一つになる。私たちは、贖^{あがな}われたということが同時に自由にされている者という意味です。

「自由にされた者のみそこを歩まん」

ということと同じことです。

「¹⁰エホバに贖^{あがな}いすくわれし者うたうたいつつ帰りてシオンにきたり、その首^{こうべ}にとこしえの歡喜^{よろこび}をいただき樂^{たのしみ}とよろこびとをえん。而^{かなしみ}して悲哀となげきとは逃^{のが}さるべし。」(イザヤ35・10)

ここにも「帰る」という言葉があるね。この9節、10節のところは非常にそれと同じことだ。

●自由の霊

もう問題ないですよ、何も心配いらんですよ。第十卷の今日の所を読んでみましょう。

「12月3日 自由の霊」



「主は即ち御霊なり、主のみ霊のある所には自由あり。我らは皆面覆かおおいを除かれて鏡に映る如く主の栄光を見、主のみ霊によつて、栄光より栄光へと進み、主と同じ相すがたに化するなり。」(コリント後書3・17、18)

「パウロはこの第三章で、我らは「活ける神の御霊で録されたキリストの手紙(エピストレー)」(3・3)だといっている。正に文字通りの活字なのである。だから本当に地上をみ霊の自由に在つて生きるなら、その生活そのものが不立文字で天界に記されている。人がどう思つこう思つではない。人の毀誉褒貶如何にもあれ、「キリストの手紙」となるんことのみ。

また彼は「儀文(グラマ)は殺し、霊(pneuma)は活かす」(3・6)といっているように、聖書も書かれたグラマであるが、聖書は聖霊で書かれた書だから、聖霊の光と生命と愛で読まなかったらパウロの言つ、「儀文(グラマ)」にしてしまふ。読んで力が来るのでなければ霊の書として読んでいないことになり、所謂「聖書研究会」的な読み方ではダメである。聖書をよむことが直ちに力となり、愛であるような身読が大切。聖書は眼で聴き、体で受けとる書だ。

眼で聴き、体で受けとる。読むのではない。キリストの言葉が、声がグーッと響いてくる。

右掲の聖句は全くすばらしい。聖霊は天的自由を与える。空を飛ぶ鳥には道がないが、あれが自由の道である。「われは道なり」と言つたイエスは正にこの自由の道であつた。キリストの中に全身で祈り入るとキリストの光を浴びる。実は鏡に映る以上に主の栄光に目がくらむ。光に貫かれて栄光化されてゆく。その人はその人らしくして、本質に於てキリストの相に化せられてゆく。」

クラーク先生が――学校の校則をいろいろ箇条書きをしたら――

「そんなものはみんないらん。ビー・ジェントルマンであれ。それでたくさんだ」と言つたという。素晴らしいね。その一語でよろしいという。

「お前たちはカンニングはしない。だから、私は監督はしない」

と言つて、私は東大でもつて一遍、試験の時に出てしまった。信ぜられれば感激する。それで悪いことをするやつは自分がダメになるだけの話だ。信ずるということと愛するということとは一つ。皆さん、そういう魂になりましょう。西郷南洲が、

「天を相手にしろ」

と言つた。こないだも『エン・クリスト』40号に書いたでしょ。あれは南洲も全く自由の魂です。空を飛ぶ鳥――だから、私は

「人間でなければ鳥になりたい」と言っているんだ。



●自由は愛の霊

ルターがああ『クリスチャンの自由』の最後のところでこう言っている。

「神さまから力が来るから、光がくるから、これを反射して神にかえす。これが神への愛だ」

と。反射していくわけです。それから、これを本当に受けとると、今度はこれがまた横に流れていく。この二つがあるわけだ。横に流れていくのが愛です。上へ反射するのが信です。信は仏教でいうと往相だ。愛は還相だ。上へ上って今度はまた下へかえってくる。そのことをルターが言っている。

「これまで述べたことから次の結論が出てくる。クリスチャンは自分自身に生きないで、キリストと隣人に生きるといことだ。信仰によってキリストに生き、愛によって隣人に生きるといことだ。信仰によってクリスチャンは自らを越えて、神の中に入っていく。神から愛によって再び自らの下にくだる。それでも神において生き、神の愛に生きる。キリストは言われるとおりだ。ヨハネ伝第1章51節に、『天ひらけて、人の子のうえに神の使いたちの昇り降りするのを汝ら見るべし』と。見よ、これが真の霊的なクリスチャンの自由であって、すべての罪や律法や掟より心を自由にし、天が地を超えているように、すべての自由にまさる自由であることを。この自由を正しく解し、また保つことを神が可能にし給わんことを。アーメン。」

そういうわけです。要するに、自由は愛の霊として自在にはたらく。もし、愛の霊に働かなかつたら、その自由は自己に捕らわれていることになる。そうすると、自由でなくなってしまう。人間だからさ、食べたいものは食べていいよ。見たいものは見ていいよ。けれども、その食べたいものを食べ、見たいものを見る、その衝動も上から来ている衝動でなければいかんといことです。自己本位の衝動に変わってしまったらだめです。

「この身体は神さまのものだ。そのためには大いにいただいて、そして、力をいただいて働きましょう、やりましょう」

という、そういう角度の食べ方だよな、同じ食べるにしても。いわゆる貪つたらだめだよ。そういう本質でもっていきましよう。どうせ、人間の在り方というものは、躓いたり転んだり起き上がったたり、いろいろなことをしているけれども、常にそれは前進あるのみといこと。決して後退しない。聖霊という原動力をもっているから、機関車をもっているから、それができる。あるいは、聖霊の翼をもっているならば、自由に飛べる。

とにかく、我々がいただいている自由というのはそこの自由とは違うといこと、質が違うんだといことを、しっかり持つてください。特に、ルターの『クリスチャンの自由』は是非お読みになってください。



●（参考）矛盾に於ける魂の為樂（『エン・クリスト』40号）

矛盾に於ける魂の為樂

——ソネット——

1989年7月30日作

天海

キリストが今日私を恵み深くも樂園に招き給わば、

私は直ちに帰天しよう深き感謝を以て。

そは神の生命と愛を得んと求める人々のため、

かの十巻をみ霊に在って書き終ったから。

之に反して私は世を去り得ない、

わが最後の課題を成し遂げるまでは。

日本が未だ著わしたことのなからう一つの詩を。

然りかかる矛盾が却って私を魂の為樂の中に置く。

太陽は如何なる天候に際しても彼女らしく輝いている。

み霊に在って私はどんな状況下でもこの山を登攀する。

山頂を極めるには、嗚呼、幾星霜かかるのか！

星辰月華が幾夜もわが幕屋に微笑みかかる。

血と涙を以てこの詩を書き終えた暁には、

これを十字架の主の御前に捧げよう。

